書　評

『パリ日記』（Das Pariser Tagebuch）
［エルンスト・ユンガー 著（山本尤訳）］
（月曜社，2011年）

田野大輔

エルンスト・ユンガー（1895-1998）といえば，一般には好戦的なナショナリスト，いわゆる保守革命の代表者と見なされる人物である。第一次世界大戦に従軍してプール・ル・メリット勲章を受け，その苛烈な体験を綴った戦争作品で脚光を浴びた彼は，数多くの政治的論考を発表して若い世代の革命的ナショナリズムに大きな影響を与え，その点をもってファシズムの先駆者，ヴァイマル共和国の墓堀人の１人に数えられることも多い。だが留意する必要があるのは，ユンガーが一貫してナチズムと一線を画し，ヒトラーの権力掌握後は芸術アカデミーへの招聘も断って，一種の国内亡命の境遇に身を置いたことである。ゲシュタポの家宅捜索を受け，執筆活動を制限されながらも，『大理石の断崖の上で』を著して大胆な時代批判を試みるなど，ユンガーのナチズムへの敵対的姿勢が揺らぐことはなかった。1939年に国防軍に復帰した彼は，41年から44年までドイツ占領下のパリに駐留し，参謀本部で私信検閲の任務に従事するが，その３年半あまりの間に綴った日記が本書である。

邦文にして400頁以上にわたる本書の記述を読むかぎり，パリでの生活は何とも優雅なものであったようである。コクトーやジュアンドーなどフランスの文人たちと交流し，ピカソやブラックのアトリエを訪ね，友人たちと町のあちこちを散策し，レストランで食事をともにする。古本屋を巡って稀覯本を買い漁り，古代神話から現代文学まで貪欲に知識を追い求める様子もうかがえる。もちろん，戦時下という現実が日記に暗い影を落としていることはたしかで，日常の細々とした話題のなかに，ときおり時代状況への批判が顔をのぞかせる。だがユンガーの筆致はあくまで淡々としたもので，傍観者のような超然とした印象を与える。パリの空襲の様子を描写した次の一節は，そうした彼の姿勢を典型的にあらわしている。

> 爆撃機の大群が二つ，楔形になって北西から南東に向かって旧市内の上空を飛んでいた。すでに爆弾を投下したあとのようであった。……その光景は不吉なものであって，あそこでは今，何百人，いや何千人もの人が窒息し，焼

け死に，失血死していることがはっきり感じ取れた。こうした陰惨なカーテンを背後にパリの町は夕日の金色の光に包まれていた。夕焼けが下から飛行機を照らしていた（1943年9月15日）。

感傷を排した冷徹な描写は，戦争が持つ黙示録的な意味と，その美学的な様式の探求に向かう。

この光景はわれわれの生とわれわれの世界の二つの大きな特徴，厳しく意識された規律正しい秩序と根源的な爆発を示していた。それは非常な美しさと同時に悪魔的な力を持っている。私はしばらく全体を展望する能力を失い，意識は風景の中に，破局の感情の中に解けてしまっていた。しかしまた破局の根底にある意味を考えてもいた（同上）。

壮絶な光景の中に意識を溶解させながら，同時に冷ややかな眼差しでこれを美的に観賞する。自己を滅却して観想に徹するユンガーの姿勢は，戦場の地獄絵を黙示録的に描写した初期の戦争作品から一貫したものといえる。ただこの日記では，彼の透徹した眼差しは身のまわりのあらゆる対象に注がれている。夜に見た蛇の夢や『千一夜物語』の1節について空想を巡らせ，公園に咲く花や岸辺を泳ぐ魚の群れをつぶさに観察し，それらの背後に隠された深遠な意味を探る。苛酷な現実に鋭く切り込む魔術的リアリズムの手法が，生と世界の神秘を解き明かすのに役立てられる。神話や文学から象徴的な形姿を呼び出し，その助けを借りて時代状況を分析する記述も頻繁に登場する。

日記について。……それはたとえばわれわれの時代を満たしている出口のなさを示しているようでもある。この出口のなさはアジアの絵画の生の大波の壮大なイメージ，あるいはE. A. ポーの大渦巻を思い出させる。しかしこの状況は途方もなく教訓に満ちている。というのも，出口もなく，希望ももはやないところに，われわれはじっと立っていることを強いられているからである（1941年11月18日）。

ポーが空想する大渦巻はすべての船を底なしの深みへ引き込むもので，それが方向を見失って破局へ向かう時代の象徴になっている。非道な時代に巻き込まれているという意識は，ナチズムの支配に対するある種の運命論的な見方につながる。ユンガーの目からすると，ナチズムとは近代の価値崩壊の最終点，

ニヒリズムの完成を意味するもので，何者も逃れることのできない歴史的宿命であった。戦時下の陰惨な出来事，とくに東部戦線での大量殺戮を耳にしていた彼は，来るべき破局への予見を次のように記述する。

> 何百万もの人の流した血に責任がある個々人がいることは疑いない。この個々人は虎のように流れる血を求めて出かけて行く。賤民の本能をまったく度外視しても，彼らの中にはサタンの意志が，人間の没落，いやおそらくは人類の没落への冷たい喜びが刻み込まれている。深い苦しみが彼らを襲うことはなく，自分たちの邪魔になる力があると見れば，怒りを爆発させ，欲望のおもむくままに徹底的に打ちのめすように見える。事態が憂慮すべきものに思われ，彼ら自身の安全が脅かされると，彼らは大量殺戮に向かう（1942年2月6日）。

「賤民の本能」が荒れ狂い，世界を奈落の底へ引き込む。こうした恐るべき事態を，ユンガーはただ静かにじっと見つめるだけである。その姿はまるで，嵐が過ぎ去るのを待っているかのようでもある。もちろん，彼は「クニエボロ」（＝ヒトラー）とそれに付き従う大衆を嫌悪感をもって見ており，そうした殺戮者たちを生み出した「隠れたもの」の解放に自分が一役買ったことも認めている（1943年4月16日）。そればかりか，彼は国防軍の反ヒトラー派の将校たちと親しく付き合い，「賤民の蜂起」に立ち向かう必要性を示し，ヒトラーを排除する可能性にも言及している。この点から，ユンガーを勇気ある抵抗の闘士と評価する向きがあることも無理からぬところである。だが彼は軍の抵抗グループの計画には懐疑的で，1944年7月20日のヒトラー暗殺未遂事件にも直接関与することはなかった。日記の記述からは，一切の政治的活動との関わりを断ち，孤独な観察者に徹しようとする決意も読み取れる。

こうした姿勢を指して，時代への迎合と批判することはたやすい。しかしヒトラーへの批判を口にすることさえ命の危険につながる状況のもとで，あくまで観察者に徹しようとするユンガーの姿勢が，困難な時代を何とか生き抜いていくための最善の方法の1つであったことは疑いない。日記を読むかぎり，彼はパリの友人たちとの交流の中で，精神的な自由の延命をはかっていたようである。

> 人間の中には，歴史が全的に息苦しい強制に陥るのをつねに妨げようとする地の塩がある。個々人は本能的に自由とは何かを知っている。たとえ警官や

捕虜のただ中に生まれたとしてもである。……監獄の中にいて初めて同僚たちの中にどのような価値が潜んでいるのかがはっきりする。人間さえ滅びなければ，すべてを諦めることができる（1941年12月3日）。

ここにはまぎれもなく，虚無的な諦念と紙一重のある種のヒューマニズムの表明を認めることができよう。絶望的な破局の中に新たな発展への転換点を，荒れ狂う大渦巻の奥底に未来への希望を見出す。そうした思考こそ，ユンガーの記述を特徴づけるものであった。

にもかかわらず，この上なく深い奥底で確実な期待が私を元気付けてくれるのは奇妙である。波の泡とちぎれ雲の合い間に運命の星は輝いている。……この時代を切り抜けようとする努力，そしてそれを通して力を得る努力，これはまったく隠れたところでなされる。立坑の底でのようにである。こうした決定的な夢はロードスへ行ったとき，パトモス山で見たのであった（1941年11月18日）。

ユンガーが見たのは，「クニエボロと彼の徒党をその権力の中枢において打倒した夢」（1943年10月26日）であったが，彼が未来を託そうとしていたのは，その後に続く若者たちに対してであった。『平和』と題する呼びかけの文書が書かれたのは，ちょうどこの頃である。

このように見ると，日記が綴られた3年半の日々は，かつて戦士のヒロイズムを賛美したユンガーが，自由を希求するヒューマニストへと脱皮していく時期であったといえるかもしれない。パリの町が持つ鷹揚な精神が，彼の堅く閉ざされた心の扉を開いていったようにも見受けられる。

実際，パリの町は特別の贈り物をしてくれるばかりでなく，私にとっては仕事と成果の源泉を秘めているといってもいい。これまでよりもはるかに重要なとも思える意味で，パリの町は今なお首都であり，古くから受け継がれた高度な生活様式と，どこの国民にも今はとくに欠けている結合理念とでもいえるものの象徴であり砦である（1941年5月30日）。

暗い時代だからこそ輝きを増すパリの町。その息吹を吸って執筆に打ち込み，様々な人々と交流を深めるユンガー。とくに「女医さん」あるいは「シャルミエ」と呼ばれる女性とは頻繁に会っていたらしく，かなり深い関係にあったこ

とがうかがえる。冷酷な審美家と見なされがちな彼のそうした人間的な一面を垣間見ることができるのも，この日記の魅力となっている。それだけに，連合軍による解放を前にしてパリの町に別れを告げる記述は，忘れがたい余韻を残している。

> サクレ＝クール寺院の展望台にもう一度登って，この大都市の見納めをした。石が灼熱の太陽の光に震えていた。新しい歴史的な抱擁を期待しているかのように。町は女性的で，勝者にのみ好意を持つ（1944年８月８日）。

> 午後，あちこちにお別れの挨拶。最後の会見。シャルミエとセーヌの岸辺を散歩。大きな転機はどれも無数の個人的な別れの中で行われる（1944年８月13日）。

淡々とした記述ながら，ここには深く胸を打つものがある。時代に翻弄された作家の，ため息のような独白。今なお毀誉褒貶にさらされているユンガーだが，その透徹した文章の魅力を本書から再認識させられた。